

論文の内容の要旨および論文審査の結果の要旨

学位申請者氏名：佐藤 雅子

学位の種類：博士（食品栄養学）

学位記番号：博（健）甲第33号

学位授与年月日：令和8年3月2日

指導教員名：高崎健康福祉大学大学院 特任教授 綾部 園子

審査委員：主査 高崎健康福祉大学 教授 木村 典代



副査 高崎健康福祉大学 教授 上原 徹



副査 千葉大学 名誉教授

石井 克枝



論文題目

小学校における食べ物の「好き嫌い」の指導に関する研究—学校給食に対する児童の思いに着目して—

A Study on Teaching Approaches to Food Likes and Dislikes in Elementary Schools :Focusing on Children's Perspectives on School Lunch

【論文の内容の要旨】

日本の小学校の給食において残食が教育的・社会的課題の一つとして指摘されており、その背景には児童の偏食や食べ物の「好き嫌い」が関与しているとされてきた。しかし、これらは主として行動上の問題として扱われることが多く、児童自身が好き嫌いをどのように認識し、その認識が給食時の喫食行動といかに関連しているのかという視点からの体系的な検討は十分ではなかった。

本論文は、日本の小学校給食における「好き嫌い」に対する指導を歴史的・制度的文脈の中で整理するとともに、児童の認識と喫食状況との関連を実証的に分析し、さらに教員の給食指導および受容的姿勢に対する児童の認識を検討することを通して、給食時間における指導の在り方を多面的に明らかにすることを目的とした研究である。

第1章では、本研究の背景、研究目的および学術的意義を示し、研究全体の構成を提示した。

第2章では、人の食行動における「好き嫌い」の要因について、先行研究を整理し、「生理的要因」「文化的要因」「個人的（心理的）要因」に大別されることを示した。その上で、嗜好と回避は複数要因が相互に作用する動的な現象であることを確認し、好き嫌いを単純な個人特性として捉えることの限界を明らかにしている。

第3章では、戦後の日本の小学校給食における偏食や好き嫌いの指導の変遷を文献資料に基づき検討した。1952年以降、「好き嫌いなく食べる」ことが文部科学省（文部省）発行の指導書等に明示され、1992年以降は栄養バランスを重視する集団指導が強調された経緯を整理した。その結果、好き嫌いへの配慮が個別指導として位置付けられつつも、実際には

栄養バランス重視の指導と結びつけることで、児童にとって「好き嫌いをしてはならない」という規範が形成されてきた可能性を指摘した。本章は制度的背景を理論的基盤として位置付ける役割を果たしている。

第4章から第6章では、千葉県、東京都、茨城県内の小学1～6年生1,965名を対象に実施したアンケート調査（2023年7～10月）の分析結果を示した。

第4章では、発達段階別に、給食の喫食状況と児童が認識している食べ物の好き嫌い、および給食に対する思いとの関連性を分析した。その結果、以下の点が明らかとなった。

(1) 好き嫌いの有無自体については、低・中・高学年の間で有意差は認められなかった。一方で、高学年においては完食率が52.2%と高く、かつ「好き嫌いはあってよい」と肯定的に捉える児童の割合が多いという特徴がみられた。

(2) 「できれば好き嫌いなく食べられるようになりたい」と思うことは、給食を楽しみとする気持ちや給食で食べられるようになった食べ物の有無と正の関連があった。

以上の結果から、給食指導においては、好き嫌いの有無そのものを問題化するのではなく、給食を肯定的に捉えられる経験を積み重ねることが重要であると示唆された。とりわけ、発達段階に応じた支援を通して、成功体験を伴う喫食経験を促すことが求められる。

第5章では、給食を「いつも残す」児童に焦点を当て、児童が認識している好き嫌いや給食に対する思い、さらに給食を通じた食の変化について、喫食状況別に分析を行った。その結果、給食をいつも残す児童は全体の10.1%（198名）を占め、特に低学年においてその割合が有意に高いことが明らかとなった。また、いつも残す児童は、完食経験のある児童と比較して、「好き嫌いがあってはならない」と捉える傾向が強く、給食を楽しみと感じていないこと、さらに給食時間に対して心配や不安を抱えていることが示された。心配・不安の具体的内容としては、「嫌い・苦手なものが提供されること」や「量が多くて食べきれないこと」が挙げられ、喫食行動の背景に心理的要因が関与している可能性が確認された。

第6章では、好き嫌いのある児童（n=1,491）を対象とし、児童が認識している教員の給食指導および受容的姿勢と、喫食状況、給食時間における楽しみ、さらに給食を通じた食行動や食嗜好の変化との関連について分析を行った。因子分析の結果、児童が認識している教員の指導は、「喫食指導」「感謝・社会性の指導」「食に関する話題提供」の3因子が抽出された。分析の結果、以下の点が明らかとなった。

(1) 児童は、挨拶指導、一口指導、感謝指導、片付け指導といった日常的な指導を多く受けていると認識していた。

(2) 14.6%の児童が、嫌いなものがあることについて教員が理解していないと捉えており、一定数の児童が自らの嗜好や困難さを十分に受け止められていないと感じている実態が示された。

(3) クラス全体での完食を促す指導や、時間内に食べることを求める指導は、好き嫌いのある児童の喫食率の向上や給食時間を楽しむ意識と関連していた。また、感謝や社会性を育む指導は、給食を楽しみと感ずることや、給食を通して食べられるようになった食品の増加と関連していた。

以上の結果から、小学校における給食指導においては、児童に苦手な食品があることを教員が受容・共感する姿勢を示すことが重要であると考えられる。そのうえで、教員が学級経営の一環として給食指導を位置づけ、感謝の心や社会性を育む視点を踏まえた喫食指導を給食時間内に展開すること、さらに、提供される献立や料理、食品に関する知識を基に話題を提供することが、児童の喫食状況の改善および給食を楽しむ意識の醸成につながる可能性があることが示唆された。

第7章では、結論として本研究で得られた知見を総括し、日本の小学校における給食指導の在り方について提言を行った。具体的には、教員が児童の食べ物に対する好き嫌いの存在を否定的に捉えるのではなく、それを前提として受容・共感する姿勢が重要であることが示唆された。また、教員は給食指導を学級経営の一環として位置づけ、感謝の心や社会性を育む指導の視点を踏まえながら、給食時間における喫食指導を計画的に実践する必要があることを提言した。さらに、その実践をより充実させるためには、学級担任と栄養教諭等が相互に連携し、それぞれの専門性を生かしながら指導を行うことが有効であると考えられる。こうした体制のもとで給食指導を展開することにより、好き嫌いのある児童にとっても、喫食状況の向上が期待されるとともに、給食時間が安心して過ごせる時間、さらには楽しみにできる時間となる可能性が示唆された。

【論文審査の結果の要旨】

学位申請者の佐藤雅子氏は、家庭科教育および食教育を専門とし、フランスの味覚教育理論を基盤とした実践的・理論的研究を継続してきた。小学校家庭科における調理学習や献立学習、給食指導に関する研究を積み重ね、食を通して子どもの認識や学びがどのように形成されるかを探究してきた。近年は学校給食における指導の在り方や児童の意識に関する研究を発展させており、本博士論文はその研究の発展的成果として位置付けられるものである。

本博士論文は、「子どもの好き嫌い」という一見身近でありながら、教育学的・栄養教育学的に十分な理論的整理がなされてこなかった主題を、学校給食という制度的かつ教育的枠組みの中で再構成した点に独自性を有している。これまで好き嫌いは、「克服すべきもの」「指導の対象」として語られることが多かったが、本研究はその前提を相対化し、学校給食指導の歴史的変遷や学校文化の中で好き嫌いがどのように意味づけられてきたのかを整理するとともに、児童自身がそれをどのように認識し、受け止めているのかという視点から問い直した。このように制度的文脈と児童の意識とを往還する構造的視点は、本論文の大きな特徴であり、学術的価値を有するものと評価できる。

また、約2,000名に及ぶ大規模な児童調査を実施し、発達段階ごとの差異を統計的に検討した点も、本研究の重要な強みである。給食指導を単なる「食べさせる技術」として捉えるのではなく、子どもが好き嫌いをどのように理解し、自己評価し、それを喫食行動とどのように結びつけていくのかを形成する教育的環境として再定義したことは、栄養教育学および学校教育実践に対して意義ある示唆を与えるものである。

なお、本論文の第3章、第4章および第5章は、すでに査読付き学術誌に原著論文または資料として公表されている 1),2),3)。本研究の成果が学術的検証を経て外部に発信されつつあることは、研究の信頼性および発展性を裏付けるものである。

博士論文審査会（令和8年1月15日）においては、佐藤氏が40分間にわたり本研究の内容について発表を行い、その後、3名の審査委員との間で活発な質疑応答および学術的議論が行われた。その過程で、用語の整理、概念規定の明確化、論理構成の一部修正など、いくつかの検討事項が指摘されたため、公開発表（令和8年2月12日）前に論文の修正を求めた。その後提出された修正論文について審査委員が再審査を行い、本研究科博士課程の学位論文としてふさわしい水準に達していることを確認した。公開発表においても、申請者は論文の要点を明確かつ論理的に説明し、質疑に対しても適切かつ誠実に応答したことを確認した。

本論文は、「制度」「規範」「児童の認識」「教員の姿勢」という複数の層を接続しながら、「好き嫌い」という教育現象を多角的に再構成した研究であり、その点において博士論文として十分な独自性および学術的意義を有するものと評価する。

以上の審査結果および最終試験の結果に基づき、審査委員会において慎重に審議した結果、本論文は博士（食品栄養学）の学位に値するものと判断した。

1) 佐藤雅子, 綾部園子 (2024). 学校給食における偏食や好き嫌いについての指導の変遷—戦後の学校教育への位置付け—. 日本家政学会誌. 75,119-131

2) 佐藤雅子, 綾部園子(2025). 発達段階における喫食状況と好き嫌いの認識の違い: 学校給食に対する児童の思いに着目して. 日本家政学会誌. 76,408-419

3) 佐藤雅子, 綾部園子(2025). 学校給食の喫食状況と好き嫌いに対する認識との関連: いつも残す児童の思いに着目して. 日本食生活学会誌. 36,115-124